

ギリシアの「招かれた帝国主義」 についての小論

——前4世紀初頭の小アジア¹——

ダニエル・ゴメス=カストロ著
藤井 崇訳

はじめに

現代史家のルンデスタッド (G. Lundestade) は1986年の論考のなかで (263-277), アメリカ合衆国が第二次世界大戦後のヨーロッパの歴史に「積極的な役割を果たす」よう重ねて「招待された」ことは、帝国主義の証拠となるのかという問いを提起した。この「招かれた帝国」というルンデスタッドの概念を、近年の論考においてチャンピオン (C. Champion) は古代の文脈に適応した。チャンピオンが強調するのは、ローマによる東方侵略の初期段階から、ギリシア各地の権力者が国内の政治闘争での立場

1 本論文は、ダニエル・ゴメス=カストロ氏 (Daniel Gómez-Castro, 以下ゴメス氏) による、前4世紀初頭の小アジアをめぐる国際関係に関する論文の翻訳である。原著はスペイン語による書き下ろし論文で、本翻訳は英語訳からの重訳となる。ゴメス氏は、2016年4月から2018年3月まで (予定)、日本学術振興会の外国人特別研究員 (一般) として、関西学院大学にて研究滞在をしている。研究テーマは、「傭兵と市場 (前386-300年): 私的ネットワークとギリシアの公的戦争システム」で、学術論文の執筆や、国際会議 (2016年11月関西学院大学, 2018年3月京都大学) の開催に取り組んでいる。ゴメス氏は、2011年にバルセロナ自治大学で博士学位を取得後、スペイン、イギリス、ギリシア、日本などで旺盛な研究活動をおこなっており、主著として、*Relaciones internacionales y mercenariado griego: del final de la guerra del Peloponeso a la Paz del Rey (404-386 BC)*, Barcelona, 2013がある。本研究とその翻訳は、JSPS 科研費 16F 16009 の助成を受けたものである。

を強化するために、この外国勢力と同盟関係を構築することを選択したという事実である。前2, 1世紀には、ローマは自身の直接の利害関心を越えてギリシア情勢に介入するよう「招かれた」のだった。エックスタイン (A. M. Eckstein, 2006, 2008) は、「招かれた帝国」というモデルを包括的にローマの帝国主義に適用した。彼の主張は、複数の勢力が自身の帝国主義的な政策に従って行動するこの時期の「多極的な」地中海世界を特徴付けた「無秩序な行動」のなかで、ローマは一人の行為者に過ぎなかった、というものである。このような観点からの類似の分析は、前4世紀のギリシアを理解するためにはなされていない。しかしながら、「多極的な無秩序」に関するモデルは、波乱に満ち政治的に分裂した古典期ギリシアの分析に有用であろうし、とりわけ、小アジアにおける政治的活動と国際関係を把握するのにふさわしいものと考えられる。前4世紀初頭の小アジアは、アテナイやスパルタといった大勢力が角逐する、絶えることのない争いの場だった。この小論は、前404年のアテナイの覇権失墜後の当地における国際関係の理解を深めるために、「招かれた帝国」という分析モデルが、これまで採用されてきたアプローチをどのように補完するのかを考察するものである。

1. トウキュディデスが伝えるギリシアにおける先例： ケルキュラの事例における恐怖

ペロポネソス戦争の初期に発生したケルキュラの内乱（前427年）は、トウキュディデスによる詳細な伝承のおかげで多くの情報が残されている、大規模な紛争のエピソードである。このアテナイ人（トウキュディデス）はケルキュラの事案に多大なる関心を寄せたが、それはこの内紛が、ひとつの都市の異なる党派が内部の問題に介入すべく外国勢力に訴えた「最初の事例のひとつ」²だったと考えられたからである。この事例で発生

2 トウキュディデスがここで「はじめて」としているのは、おそらく、来た

したア・プリオリには自己矛盾する「招かれた帝国主義」という概念を理解するために、トゥキュディデスは自身の分析に重要な理論的原則を導入したと考えられる。以下に引用した2箇所は、トゥキュディデスの叙述においてこの事件が持った重要性を、余すところなく伝えている。

このように残忍なものとして、この内乱は進行した。しかも後続して起こったもののうちで、これは最初のものであっただけに、とりわけ残忍なものと思われたのである。実際その後、言わば全ギリシア世界は激動することになったからである。到る所で戦争があり、民衆派の指導者はアテナイ軍を、寡頭派はラケダイモン軍を招き寄せようとしていた。平和の時代には両派とも外国勢力の干渉を招く口実も用意もなかったであろうが、両大国が戦争に入ってから、同盟も結ばれたので、いずれの側にとっても国内の政敵を弾圧し、同時に自派の利益を増大するために、何か革命を求める者にとっては同盟軍を導入することが極めて容易になったのである。(Th.3.82.1. 藤縄謙三訳)

そして高潔の主要素をなす素直さは、嘲笑されて姿を消し、代わって相互不信による思想的対立が広く行き渡った。なぜなら、和解へと導く確たる言葉も、畏怖すべき誓約も存在しなかったので、優勢な立場にある者は誰でも、安全は絶望的だと見込んで、相手を信頼できなかったため・・・(略)・・・(Th.3.83.1-2. 藤縄謙三訳)

国内の対立グループが自分たちのために外国勢力の介入を求める決定へ

-
- ㄨ るべきより広範なペロポネソス戦争を踏まえてのことであろう。彼がはっきりと「はじめて」と述べるのは、ずっとのちのことである (πολλά αὐτῶν προουλομήθη : Th.3.84.1)。しかしながら、この最後のパラグラフについては、研究者や注釈者からその真贋に疑問が呈されているため、ここでは分析に含めなかった。この点についての議論は、Gomme (1956:382) and Hornblower (1991:488) をみよ。

と至った最大の要因として、大量虐殺が存在していたかもしれないことを考えると、ケルキュラでの「内乱から生じた極度の残虐性」を考慮に入れることが重要である。トゥキュディデスの作品では、共同体が宣戦布告をしたり、国家の利益のためにその他の暴力的、もしくは道徳的に非難すべき行為に至る背景にある人間行動の探求のなかで、「恐怖」が重要なライトモチーフとしてあらわれるが (Th.1.23.6)³、先のトゥキュディデスの発言をこうした作品全体の文脈のなかで考察しなければならないという点は、ほとんど指摘するまでもないことだろう。恐怖はまた、国家の内政の支配や監督のために外国勢力を招来することで、国家自体の自由を犠牲にするという政治的には考えられない行為をもたらすとも考えられる。先に述べたように、平時にはいかなる党派もあえてそのような手段をとろうとはしなかったのである。

おそらくトゥキュディデスの考えるところでは、戦争が引き起こした恐怖が今度は共同体内部での道徳的退廃のプロセスを同時進行で開始させ、それが理性的なギリシア人の生活を存続不可能にし、政治的自由の放棄へとつながるのだった。この退廃によって、日常的な出来事の描写に道徳的意味合いや暴力への暗喩が付与され、通常の言葉が新しい意味を持つようになった (Th.3.82.4)⁴。政治的暴力は家族や宗教といった社会の他の側面にも波及し、家庭内暴力（「子供たちはその父親たちによって殺された」）や、嘆願者が神殿から引き出されたり、殺害されたり、果ては壁で閉じ込められるといった凶暴な不敬行為となってあらわれた (Th.3.81.5)。

トゥキュディデスによって語られるケルキュラの事例では、「招かれた帝国主義」は、暴力が制御不可能となるまでに共同体を道徳的に退廃させる、対立する思想を代弁する者たちの間での極度の恐怖と不信の結果とし

3 恐怖をペロポネソス戦争の要因で「真の原因」と考える議論については、Gomme (1945:152)；Hornblower (1991:64-66)をみよ。

4 この点については、Müri (1969)；Solmsen (1971)；Hogan (1980)；Wilson (1982)；Worthington (1982)；Büchner (1983)；White (1984)；Loraux (1986) and Spina (1999)で十全に扱われている。

て提示されている。このトゥキュディデスの叙述から読み取るべきは、ケルキュラ人を襲った恐怖と不信は、ケルキュラが大勢力間の国際紛争のなかでひとつの「戦略拠点」となってしまったことに起因する、という点である⁵。苛烈な内乱で惹起された複雑な政争は（Th.4.48.1-6）、外国勢力による処理と保護によって解決された（Th.4.46.1）。

2. 小アジアのギリシア都市（前 412 年から前 400 年まで）

小アジアのギリシア都市が直面した状況は、ケルキュラの事例よりもさらにもっと複雑だが、それでも、ケルキュラ人がアテナイ人を国内問題に介入させるに至った諸事情と、一定程度の類似性を見いだすことができる。

小アジアのギリシア人が、ペルシア帝国の影響の元に再度おかれることになったという事実には、留意しておかなければならない。前 412 年と前 411 年に結ばれたスパルタとペルシアの同盟に基づいて、スパルタはペルシア大王のギリシア都市にたいする統治権を認め、ペルシア領内への侵攻は今後おこなわないと確約したのである（Th.8.37.1-5）。しかし、アテナイの支配が崩壊すると、これらの都市のなかで深刻な党派争いが勃発した（X. *HG* 3.4.7; *Ages.* 1.37）⁶。ミレトスの事例は、この種の党派争いの典

5 ケルキュラは、コリントスとシチリアの間の交易にとって、重要な中継地だった。アテナイ人にとって、ケルキュラはギリシア世界で（自身に次いで）2 番目に大きな艦隊を支配するために、決定的に重要だった（Th.1.36.2, 44.2）。

6 有名なものとしては、リュサンドロスが 800 名のミレトスの民衆派の亡命を許さず、処刑した事例がある（*Plu. Lys.* 19.3）。この情報は、クセノフォンが伝える、前 397 年のデルキュリダスの経験とも一致する。彼が目撃したところでは、亡命キオス人の略奪にもかかわらず、アゲシラオスが小アジアに到着する 1 年前には、諸都市は比較的落ち着いた状態にあった（X. *HG* 3.2.11）。わたしは、この伝えが諸都市の社会状況ではなく、その政治的立場に注目してなされたものと解釈したい（そして、事実ティプロンの仕事にたいする弁護ともなっている）。諸都市は、寡頭派の支配下にあったのである。この点については、*Debord*（1999: 235）をみよ。デボールは、この問題を十人委員の解任時期の観点から議論している。

型的なものである。ラクダイモン人寄りの寡頭派は、小キュロスを自分たちの当面の社会的・経済的関心に近い指導者と考えた一方⁷、伝統的にアテナイ人寄りの民衆派は、総督のティッサフェルネスに期待を寄せていた。

弟の小キュロスによるクーデターを鎮圧したのち、アルタクセルクセスはキュロスによって支配されていた総督区を引き渡したティッサフェルネスの援助に感謝の意を示した。ここで、小アジアの寡頭派は、新しい総督がキュロスのクーデターを助けた者たちに報復し (D.S.14.35.1)、彼が政治運営にたいするリュサンドロスの影響をあらゆる点で押さえ込むために、新たに民主的政体を推し進めるのではないかと憂慮した。このことが、トゥキュディデスがケルキュラの事例に関して伝えるような共同体内部での緊張関係を生み出したことは、明らかである⁸。小アジアの寡頭派はスパルタの介入を要請して、現状を維持し、戦争前の現状への復帰を阻止し、彼らの主張するところでは、自分たちの自由 (ἐλευθεροί) を保全することを試みたのだった⁹。

7 このことが、リュサンドロスと小キュロスとの友好関係の背景にあったことは疑いない (X. *HG* 1.5.6-8)。ミレトスの事例以外にも、ペルシア人と親アテナイ派の結びつきについて、クセノフォンの言及からいくつか推測をすることができる。小アジアの諸都市は、アテナイの「友人」として前 391 年から前 390 年の間にペルシア王と連携した (*HG* 4.8.27: ἐχόντων δὲ τούτων τε καλῶς καὶ τῶν ἐν τῇ Ἀσίᾳ πόλεων διὰ τὸ βασιλέα φίλον τοῖς Ἀθηναίοις εἶναι)。また、クセノフォンによれば、ファルナバゾスとビュザンティオンの民衆派 (残りのヘレスポントスのギリシア人とあわせて) が「友人」であったのは、総督がアテナイ人と結んでいたからだった (X. *HG* 4.8.31: αἰσθόμενοι δ' οἱ Λακεδαιμόνιοι ὅτι ἡ δεκάτη τε τῶν ἐκ τοῦ Πόντου πεπραμένη εἶη ἐν Βυζαντίῳ ὑπ' Ἀθηναίων καὶ Καλχηδόνα ἔχουσι καὶ αἱ ἄλλαι Ἑλλησπόντια πόλεις φίλου ὄντος αὐτοῖς Φαρναβάζου εὖ ἔχουεν)。

8 ペロポネソス戦争の最終段階 (前 412 年から前 404 年まで) における小アジアの諸都市を特徴付けた激しい党派争いについては、Debord (1999: 236 ff) をみよ。

9 ディオドロスが小アジアの諸都市における「自由」への要求に言及していないことには、注意しなければならない。むしろ彼が言及するのは、小キュロスのクーデターに加勢した者たちに、ティッサフェルネスがどう対応するかという恐怖についてなのである (14.35.1 ss)。したがって、自由の主張は、帝国主

3. 地方史と国際史¹⁰

リュサンドロスと帝国

小アジアのギリシア諸都市が直面した状況は、いわゆる第2次スパルタ帝国建設の動向と緊密に関連している（Parke 1930）。プルタルコスによると（*Lys.* 25）、スパルタの提督リュサンドロスが思い描いた海上帝国は、ラケダイモン人の国制の根本的変更にまで至る野心的な試みだった。この計画を実現するための第一歩は、アテナイ人が築いた既存の帝国ネットワークに基づいて、エーゲ海に海上帝国を建設することだった。この企図は、スパルタ自体の内部権力の社会的・政治的再構成へと、大きく歩みを進めるはずだった。リュサンドロスは、艦隊勤務で経済的・社会的上昇を目指す「下層」のラケダイモン人（*hypommeiones*）を、自身の利益のために利用したのである¹¹。変革の機運が高まり、政治運営においてリュサ

ㄨ 義者による介入の政治的正当化であるように思える。クレントツ（Krentz 1995: 169）が指摘するように、前397年、小アジアの使節たちはティッサフェルネスをペルシア大王と取り違え（X. *HG* 3.2.12）、自由（*eleutheria*）にかわって自治（*autonomia*）の語を使用したようである。自治の概念をもっとも好んで使用したのはラケダイモン人で（X. *HG* 3.2.20）、小アジアのギリシア人ではなかった（彼らは、自由の語を好んだ：X. *HG* 3.1.3）ので、これは驚くべきことである。自治の権利が、ペルシア戦争以降のギリシアの諸勢力によって主要な開戦事由として唱えられてきたこと（ペロポネソス戦争やエリス戦争）を考慮すると、クセノフォンは意図的にこのエピソードの叙述を曲げて、「反スパルタ」のティッサフェルネスにアジアでの戦争責任を押し付けようとしているのではないだろうか。自治の概念についての研究には、十分な蓄積がある。この問題への多様かつ意義あるアプローチについては、以下の文献をみよ。Seager (1974: 36-63) ; Moritani (1988: 573-77) ; Bosworth (1989: 122-151) ; and Fornis (2008: 298-327)。

10 デボールが指摘するように、この時代のギリシア世界の歴史を分析するにあたって生じるおもな問題は、地域史の要素をどのように国際関係の研究に統合するかという点にある。この問題は、まさにわたしがこの節で、試論ではあるが取り組もうとしたものである。ただし、詳細な分析は紙幅の関係上不可能なので、以下の諸研究に読者の関心に向けておきたい。Rahe (1980) ; Lanzillota (1980; 1981) ; Ruzicka (1983; 1992) ; Aykio (1988) ; and Sato (2006)。

11 *Hypommeiones* とリュサンドロスの企図における彼らの役割についての最新 ㄨ

ンドロスがさらに重きをなしてくると、前 403 年に帝国制度を解体する動きが加速し、王パウサニ阿斯はアテナイの党派争いに加担して民主政を復活させた (X. *HG* 2.4.29 ff)。前 400/399 年までに、リュサンドロス派の野望はくじかれてしまった。この間の推移は、偶然ではない。小キュロスとの同盟で、リュサンドロス派は小アジアの寡頭派の偉大なるパトロンとなった (小キュロス自身が、リュサンドロス不在の小アジアで、寡頭派の保護者となった)。しかしながら、若きペルシア王子はクーデターに失敗し、当地で新たに築いた覇権を放棄したくなかった寡頭派の間に恐怖が広がった。ここに至って、寡頭派はスパルタに援助を要請したのである。

スパルタへの招請 (前 400 年から前 395 年まで)

クセノフォンの叙述にみられるかなり偏向した用語を受け入れるならば、小アジアの同盟都市が 2 回にわたってスパルタの戦略に異を唱えるに至ったのは、前 399 年から前 396 年までおこなわれた戦争の受動的な性格ゆえだった (X. *HG* 3.1.8; 3.2.12)。小アジアの同盟都市がスパルタの利害を正当と認めたのは、アウリスでアゲシラオスがアガメムノンを模倣 (*Immitatio Agamemnonis*) して以降のことである (Ragone 1996)。これ以降、小アジアの同盟諸都市はラケダイモン人に以前より好意的な態度を示すようになり、彼らのうち 2000 名がハリアルトスにおけるスパルタの大敗 (前 395 年) 後にアゲシラオスに従ってヨーロッパ側のギリシアに渡るようになった。この時アゲシラオスは、「秩序」を回復するために小アジアに戻ってくるとの約束をしていたのだった (X. *HG* 4.2.2-5)。同盟都市の民衆派が、このようなスパルタ帝国主義の熱狂的支持をおこなったとは考えにくいし、クセノフォン自身が記すように、アゲシラオスは同盟諸都市で大変な暴動に遭遇し、都市防衛のために 4,000 名の守備隊を設置する

ㄨ の文献案内と議論については、Gómez Castro (2017) をみよ。より具体的に、クリエンテラ関係でリュサンドロスと結びついた社会グループを中心とした分析については、Bernini (1988) をみよ。

必要に迫られたのである (X. *HG* 4.2.5; *Ages*. 1.38)。

コリントス戦争 (前 395 年から前 386 年まで) の勃発にともない、コノンの影響力によって、諸都市の民衆派優位に状況が変化していったようである。とりわけ、クニドス沖の海戦 (前 394 年) でラケダイモン人艦隊を大敗北させたのちはこの状況が顕著で、コノン自身とファルナバズスは残った十人委員を一人ずつ打倒し、彼らのハルモステスを追放して、諸都市に自治を付与した (X. *HG* 4.3.11-13; D.S. 14.83.5-7)¹²。この観点からは、ロドス島の事例が特に興味深い。

ロドスは、スパルタとペルシアの同盟が正式に成立してすぐのちの前 411 年、デロス同盟から離脱し、親スパルタのディアゴラス家がカメイロス、イアリュソス、リンドスで政権を掌握した (Th.8.44.1-3)。その後、ロドスはスパルタの正式な同盟国の一つとなったが、前 396 年、ディアゴラス家はペルシア大王支持へと立場を変更した (D.S.14.79.6)。こうした大きな立場の変更にもかかわらず、ファルナバズスはディアゴラス家を信用せず、この一族は 1 年後 (前 395 年) に、おそらくはコノンによって扇動された民衆派反乱によって根絶やしにされてしまった (*HOxy* 15; Fornis 2007: 204-205; 2008: 57-60)¹³。ロドスはアジアでの戦争のための重要な戦略拠点で、東方とエーゲ海を結び、小アジアの軍隊に糧秣を供給する基地として利用できた。ディオドロスが示唆するように (14.97.2)、スパルタはまさにこの理由で、ペルシアの支持を得た民衆派の手から島を再征服するよう「要請」した親スパルタのロドス使節を、最大限に利用しよう

12 デイオドロス (14.84.2-5) は、クニドス沖の戦いでペルシア側に転向した島々を順に並べている。スパルタが十人委員を解任した時期について、研究者の見解が一致していないことについては、注意しておかなければならない。従来、これは前 403 年のこととされ、一次史料にも十分な根拠があり (X. *HG* 3.4.2)、この時代の歴史的展開の一般的な理解にも合致している。しかし、他方で Hamilton (1992: 47) は、これを前 397 年のこととしている。この議論に関する重要な整理は、Andrewes (1971: 206-216) でなされている。

13 エーゲ海におけるロドスの地政学的な重要性については、以下の文献をみよ。Berthold (1980: 32-49); David (1984: 271-284); and Fornis (2007: 204 s)。

ギリシアの「招かれた帝国主義」についての小論

としたのである (X. *HG* 4.8.20)。

ロドスの寡頭派の一部がスパルタにたいしておこなった招請は、ケルキュラや小アジアのギリシア諸都市の事例に確認されるものと非常に類似した状況のなかでおこなわれたが、ロドスの事例は民衆派を優遇するペルシア主導の体制という点でも、興味深いものである。ペルシア人は、寡頭派がまず小キュロス、ついでリュサンドロス、そして前 396 年からはアゲシラオスを援助したことを知悉しており、体制変革を扇動することが、一時的であれ戦争中の一戦略としてであれ、ラケダイモン人の諸都市にたいする影響力を削ぐのに有効な手段であることに気づいていた。しかし、別の理解の仕方も可能である。アテナイ寄りの民衆派にとっては、この時点でアテナイと正式に同盟を結んでいたペルシアの戦略は、自分たちの望む政体を導入し、同時に国内の政敵を打倒するために申し分のないチャンスとなっただろう。ただ、こうした結論は、ペルシアの総督の統治を偏向して伝える史料にみられる傾向に過度に依拠するもののように思われる。こうした史料は、「アテナイ人と同盟を結んでいる」とか「スパルタ人と同盟を結んでいる」といった、まったくギリシア中心主義を強化する方向で総督の統治を定義しており、ペロポネソス戦争の善悪二元論的な見方を支える過度な単純化に終始している¹⁴。以上の理由から、わたしは後者の仮説よりも、前者の仮説をより重視したいと思う。

ペルシアへの招請 (前 394 年から前 390 年まで)

小アジアの諸都市は、当地でのラケダイモン人の影響力低下後、前例のない自治の時代を享受したと考えられる (そして、おそらくこれは、親スパルタの寡頭派の衰退をもたらした)¹⁵。それでもなお、戦争がおこって

14 上記の註 6 を参照。クセノフォンは、総督ストルタスを *Ἀθηναίους φιλικῶς* (*HG* 4.8.17) と描写している。フォルニス (Fornis 2008:109) が主張するように、総督たちは親スパルタや親アテナイだったわけではなく、単に自分たちの利益になる同盟関係を模索する現実主義者だったのである。

15 おそらくはこの状況下で、小アジアの諸都市で ΣΥΝ (ΣΥΝΜΑΧΩΝ) の銘 *Α*

おり、また小アジアにはラケダイモン人のハルモステスが依然として駐在していたので¹⁶、小アジアのギリシア人の一部は前392年、ペルシアとの交渉を正式に再開したようである。事実、この年の終わりに年代決定されるある文書は、総督ストルタスにミレトスとミュスの領土争いの仲裁が求められたことを伝えている。総督は諮問団設立のために12のイオニア都市から代表者を招き、ストルタスと諮問団はミレトス有利の判断を下した(SIG 134=SGHI no.113=GHI no.16=Tod, 113)。このため、これらの諸都市はいずれもペルシア大王と戦争状態にはなく、したがって、スパルタの同盟者ではありえなかったと思われる。

この状況は、前391年に開始されたラケダイモン側の反撃によって、流動化した。スパルタは2度の遠征で、ロドスを再征服し、アジア側の都市と島嶼を奪取した(ミュティレネを除くレスボス全土、サモス、エフェソス、クニドス、マグネシア、プリエネなど)。この紛争がエスカレートすることで、小アジアの諸都市がペルシアとの連携を強化する必要に迫られたことは疑いなく、さらにティブロンを戦死させた軍隊が、小アジア諸都

-
- 、 を持つ貨幣が製造されたのだと考えられる。この銘の意味は、研究者の間で激しい議論の対象となっている。フォルニス(2008:181)は、クニドス沖の海戦でのスパルタの大敗北以後、小アジアとその近辺の諸都市(ピュザンティオン、エフェソス、クニドス、サモス、キュジコス、ランプサコス、ロドスなど)が同盟を設立したと主張する。これに基づいて、フォルニスはこの貨幣製造を前394/3年から前386年の間と考えている(後者の年に、小アジアの諸都市では貨幣製造が非合法となった)。一方、バスクアル(Pascual 1995:822)とデボール(Debord 1999:277)は、おもて面のヘラクレスの意匠に基づいて、それよりは少し遅い、エパメイノンダスによるポイオティア戦争(前367年から前362年まで)に近い年代を提示している。この時、テバイ人は第二次アッティカ=デロス同盟の発展を妨害しようとしていたのである。また別の研究者は、この貨幣製造はスパルタによる海上帝国再建の動き(前390年以降)を反映していると主張してきた。この点についての歴史家たちの論争についての詳細は、Formis 2008:183, n. 33をみよ。
- 16 前395年にアゲシラオスが退去しても、小アジアにおけるスパルタのプレゼンスが完全に消滅したわけではなかった。パーケ(Parke 1930:68)が主張するように、前393年から前391年にかけて、この地域に2名のハルモステスが残っていたことを示す証拠が存在している(X. HG 4.2.5; D.L. 2.6; Polyae. 6.10)。

市の反スパルタ派のギリシア人からなる 5,000 の重装歩兵から構成されていたことも、驚くには値しない (D.S.14.99.2)。

アテナイへの招請 (前 389 年から前 386 年まで)

これまで述べてきた諸事例は、この時代に小アジア、ヘレスポントス、そしてエーゲ海諸島を通じて、民主的政体の著しい増加があったことを示唆している¹⁷。この状況で、アテナイがその海上帝国を再建し¹⁸、諸都市をペルシアから引きはがして自分たちへと引き寄せようとしたことは、驚くべきことではない。もちろん、これはペルシア帝国政府には受け入れられることではなかった。アルタクセルクセス王のなかでは、小アジアの諸都市にたいするペルシアの統治権に反対して、前 392 年の和平に反対したアテナイは、信頼のおけない同盟者となっていた (Pl. *Menex.* 245 B-C; Philoch. *FGrH* 328 F 149)¹⁹。海上支配を回復するために、アテナイはキプロス島サラミスのエウアゴラスの反乱に援軍を送り、ペルシアによるエジプト再征服の遠征を危険にさらすことになった²⁰。アテナイが小アジアでの権力基盤の再建に自信を深めたことにたいする、おそらくもっとも明確な証左は、トラシブプロスが 5 パーセントの関税を導入したことである。

17 民衆派、アテナイ人、ペルシア人との関係については、すでに述べたミレトス、ロドス、ビュザンティオン以外にも、関係する史料について言及してきた。島嶼部では、デロスの事例が特筆に値する。前 394 年以降、ペロポネソス戦争でのアテナイの敗北後はじめて、アッティカ風の 4 年ごとの祭礼が復活された (*JG* II² 1633; 1634; 1635)。

18 シーガー (Seager 1967: 95-115) とコークウェル (Cawkwell 1976: 270-277) は、トラスビュロスがビュザンティオン (*JG* II² 24; X. *HG* 4.8.25-31; D. 20.59) とクラゾメナイ (*JG* II² 28 = Tod 114) にたいし 5 パーセントの関税を課したことに注目して、この主張を裏付けている。

19 クセノフォンは言及していないが、同じことが前 386 年の大王の和約に続いて起こったことが知られている (D.S.14.110.4)。

20 この出来事についての詳細と文献案内については、Gómez Castro (2011) をみよ。

結 論

これまで述べたケース・スタディに基づいて、「招かれた帝国主義」という概念を理解し適応するための理論的枠組みをさらに発展させることが可能である。外国勢力に介入を招請する事態が拡大した主な要因として、トゥキュディデス自身が強調するように、国際的に重要な政治問題にたいする共同体の公式見解をめぐる不和に端を発した、党派争いの出現があった。エックスタインの言葉を引用しよう。こうした展開がみられたのは、複数の利害関係者が覇権を目指す国際秩序における、「多極的」で「アナキー」な諸関係という文脈においてである。政治的に分断されたギリシア人の世界では、「招かれた帝国主義」という現象は、以下のいずれかの状況で発生している。(a) 大勢力間の大規模な国際戦争（例えば、ケルキュラの場合）。(b) 新たな帝国建設事業（例えば、小アジアのギリシア都市の場合）。どちらの状況も、紛争に直面した小規模の共同体に選択を迫るべく大きな重圧を与えた。

小アジアの場合には、第三の選択肢があった。スパルタである。スパルタは、伝統的にアテナイとペルシアの影響が顕著であった地域の国内政治に介入し、以前はキュロスの援助に頼っていた当地の寡頭派のために、国制の継続を保証した。この地域でペルシアもしくはアテナイに忠実だった勢力は、共通の敵、つまり親スパルタの寡頭派を打倒するために結びついた。同時に、イデオロギー的に分断された小アジアのギリシア人のなかに、ペルシア人への憎しみを共有して和解が成立する契機も生み出された。こうした動向は、諸都市の国内政治の再編も促した。過激化と政治的暴力が加速する一方、アゲシラオスがスパルタに戻るために小アジアを見捨てる計画であることが知られると、地域の寡頭派には裏切られたという意識が強まった (X. *HG* 4.2.3-5)。アゲシラオスの退去は、小アジアの親スパルタ派にとって、大きな痛手となった。彼らは、政治的立場を変え、

諸都市は最初にペルシアと、次にアテナイと友好関係に入った。さらにこの地域で新しい同盟関係が構築されると、地域レベルで社会構造が流動化した。以前であれば親スパルタ派の人々と結びついていた反ペルシア派は、親アテナイ派と共同するようになり、親ペルシア派と親スパルタ派の人々を政治の中枢から排除した。

結論としては、もし私たちがトゥキュディデスの歴史理解に留意して、この時代の国内・国際政治の基本的な動因として恐れを考えるならば、ケルキュラや小アジアのギリシア都市の市民の間に生じた恐怖の源泉は、外敵ではなく、イデオロギー上相反する党派に属した同僚市民だったと言わねばならない。こうした状況は、地域レベルでの権力関係の再編を可能とした（そしてこの再編は、外圧によって形成された）。ギリシア人共同体のこうした再編は、通例、財産没収や政敵の亡命につながったが、本論の事例では事態はより深刻で、共同体は国家の崩壊、大量殺戮、そして市民の奴隷身分への身売りなどに直面した。この地域で影響力を拡大し、それぞれの帝国建設事業に取り組んだ国際勢力は、このように混迷した状況から生じた恐怖の雰囲気を利用したのである。

文献一覧

- ANDREWES, A. (1971), 'Two Notes on Lysander', *Phoenix* 25, 206-226.
- AYKIO, K. (1988), 'Clazomene, Eritre ed Atene prima della Pace di Antalcida (387 a. C.)', *Acme* 41, 17-33.
- BERNINI, U. (1988), *Lysandrou kai Kallikratida sygkrisis. Cultura, ètica e politica spartana fra quinto e quarto secolo a.C.*, Venezia.
- BERTHOLD, R. M. (1980), 'Fourth Century Rhodes', *Historia* 29, 32-49.
- BOSWORTH, A. B. (1992), 'Autonomia: the Use and Abuse of Political Terminology', *Studi Italiani di Filologia Classica* 85, 122-151.
- BRIANT, P. (1996), *Histoire de l'empire perse. De Cyrus à Alexandre*, Paris.
- BÜCHNER, K. (1983), 'Vera vocabula rerum amissimus: Thukydides und Sallust über den Verfall der Wertbegriffe', Zehnacker, H., Hentz, G., *Hommages a Robert Schilling*, Paris, 253-261.
- CANALI DE ROSSI, F. (2007), *I Greci in medio oriente ed asia centrale. Dalla fondaz-*

- ione dell'Imperio Persano fino alla spedizione di Alessandro Magno (550-336 aC circa)*, Roma, 2007.
- CAWKWELL, G. (1976), 'The Imperialism of Thrasybulus', *CQ* 26.2, 270-277.
- CHAMPION, C. B. (2007), 'Empire by invitation : Greek political strategies and Roman imperial interventions in the second century BCE', *Transactions of the American Philological Association* 137.2 : 255-275.
- DAVID, E. (1984), 'The Oligarchic Revolution at Rhodes, 391-89 BC', *CP* 79.4, 271-284.
- DEBORD, P. (1999), *L'Asie Menor au IVe s. (412-323 aC)*, *Pouvoirs et jeux politiques*, Bourdeaux.
- ECKSTEIN, A. M. (2006), *Mediterranean anarchy, interstate war, and the rise of Rome*, Berkeley.
- ECKSTEIN, A. M. (2008), *Rome enters the Greek East : From anarchy to hierarchy in the Hellenistic Mediterranean, 230-170 BC*, Oxford and Malden (MA).
- FORNIS, C. (2007), 'Las causas de la guerra de Corinto : un análisis tucidídeo', *Gerión* 25.1, 187-218.
- FORNIS, C. (2008), *Grecia Exhausta. Ensayo sobre la guerra de Corinto*, Göttingen.
- GÓMEZ CASTRO, D. (2011), 'La campaña egipcio-chipriota (383-373 a.C.) : relaciones internacionales y mercenarios griegos en Oriente', *Gladivs, Revista del CSIC* 31, 43-56.
- GÓMEZ CASTRO, D. (2017), 'A Spartan Warlord : Lysander and the construction of a New Greek Empire', Ñaco del Hoyo, T., López Sánchez, F. (eds), *Warlords, War and Interstate Relations in the Ancient Mediterranean 404 BC-AD 14*, Leiden (in press).
- GOMME, A., ANDREWES, A., DOVER, K. (1945), *A Historical Commentary on Thucydides vol.I*, Oxford.
- HAMILTON, C. (1992), 'Lysander, Agesilaus, Spartan Imperialism and the Greeks of Asia Minor', *AncW* 23, 35-50.
- HOGAN, J. T. (1980), 'The ἀξιώσις of Words at Thucydides 3.82.4', *GRBS* 21, 139-149.
- HORNBLOWER, S. (1991), *A Commentary on Thucydides. Volume I*, Oxford.
- KARAVITES, P. (1984), 'The political use of ELEUTHERIA and AUTONOMIA in the fourth century among the Greek city states', *RIDA* 31, 167-191.
- KUHRT, A. (2001), *El Oriente Próximo en la Antigüedad vol.II (c.3000-330 aC)*, Barcelona.
- LANZILLOTA, E. (1980), 'La politica spartana dopo la pace di Antalcida', *MGR* 7, 129

-179.

- LANZILLOTA, E. (1981), 'Le città greche dell'Asia Minore dalla battaglia di Cnido alla Pace di Antialcida', Gasperini, L. (ed), *Scritti sul mondo antico in memoria di Fulvio Grosso*, Roma, 273-288.
- LÉVY, E. (1981), 'Les trois traités conclus entre Sparte et le Roi', *BCH* 107.1, 221-241.
- LORAUX, (1984), *The Invention of Athens: The Funeral Oration in the Classical City*, London/Cambridge (Mass).
- LUNDESTADE, G. (1986), 'Empire by Invitation? The United States and Western Europe, 1945-1952', *Journal of Peace Research* 3, 263-277.
- MORITANI, K. (1988), 'KOINE EIRENE: Control, Peace, and 'Autonomia' in Fourth-Century Greece', YUGE, T., DOI, M. (eds), *Forms of Control and Subordination in Antiquity*, Leiden, 573-577.
- MŪRI, W. (1969), 'Politische Metonomasie (zu Thukydides 3, 82, 4-5)', *MH* 26, 65-79.
- PARKE, H. W. (1930), 'The Development of the Second Spartan Empire (405-371 B. C.)', *JHS* 50.1, 37-79.
- PASCUAL, J. (1995), *Tebas y la confederación beocia en el periodo de la guerra de Corinto (395-386 a.C.)*, Tesis Doctoral microfilmada, Universidad Autónoma de Madrid.
- RAGONE, G. (1996), 'L'Imitatio Agamemnonis di Agesilao fra Aulide ad Efeso', *MGR* 20, 21-49.
- RAHE, P. A. (1980), 'The military situation in Western Asia on the eve of Cunaxa', *AJPh* 101/1, 79-96.
- ROMANO, R. (1996), 'I trattati spartano-persiani durante la guerra deceleica', *Studi di Antichità* 9, 235-256.
- RUZICKA, S. (1983), 'Clazomenae and the Persian Foreign Policy, 387/6 B.C.', *Phoenix* 37, 104-108.
- RUZICKA, S. (1992), 'Athens and the Politics of the Eastern Mediterranean in the Fourth Century B.C.', *Hellas* 23.1, 63-70.
- SANCISI-WEERDERBURG, H. (1993), 'Political concepts in Old Persian inscriptions', Raaflaub, K. (ed.), *Anfänge des politischen Denkens in der Antike, Schriften des Historischen Kollegs Kolloquien* 24, Oldenburg, 145-163.
- SATO, N. (2006), 'Athens, Persia, Clazomenae, Erythrae: an Analysis of International Relationships in Asia Minor at the Beginning of the fourth Century BCE', *BICS* 49, 23-37.
- SEAGER, R. (1974), 'The King's Peace and the Balance of Power in Greece, 386-362

- B.C.', *Athenaeum* 52, 36-63.
- SEAGER, R. (1967) : 'Thrasylbulus, Conon and Athenian Imperialism 396-386 B.C.', *JHS* 87, 95-115.
- SOLMSEN, F. (1971), 'Thucydides' Treatment of Words and Concepts', *Hermes* 99, 385-408.
- SPINA, L. (1999), 'Chiamare le cose col loro nome : a proposito di Tucidide III 82.4', *QS* 49, 247-260.
- TOD, M. N. (1948), *A Selection of Greek Historical Inscriptions vol.II*, Oxford.
- WHITE, J. B. (1984), *When Words Lose Their Meaning : Constitutions and Reconstitutions of Language, Character, and Community*, Chicago, 59-92.
- WILSON, J. (1982), 'The Customary Meanings of Word Were Changed -Or Were They? A note on Thucydides 3.84.2', *CQ* 32, 18-20.
- WORTHINGTON, I. (1982), 'A note on Thucydides 3.82.4', *LCM* 7, 124.